

敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科 1年生の英語能力・英語学習に関する実態調査(3)

川 又 正 之、上 野 恵美子

はじめに

本学英語文化コミュニケーション学科の学生たちは、いったいどのような目的や意識を持って入学してきたのであろうか。また、中学・高校時代にはどのように英語を勉強してきたのであろうか。さらに、入学後の英語学習にはどのように取り組んでいるのであろうか。

本稿では、一昨年度(2017年度)、昨年度(2018年度)に続き、2019年度入学の敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生について、英語能力の実態や英語学習への意識等を明らかにすることを試みる。

英語能力については、2019年4月に行われたプレイスメントテストの結果をもとに、また、英語学習については、2019年10月に行われたアンケートの結果を踏まえて、それぞれ分析と考察を行う。なお、2017年度、および2018年度の英語文化コミュニケーション学科入学生(現2,3年生)に対しても同様の調査を行っており、その結果についても必要に応じて言及する。

1. 英語能力に関する実態調査ープレイスメントテストの結果について

本学では開学時より英語プレイスメントテストを行ってきており、主に共通教育における英語プログラムのクラス分けに活用している。¹⁾ 開学からしばらくは専任教員作成の問題が使用されたが、その後外部テストが使用されるようになった。現在はELPA(英語運用能力評価協会)の英語プレイスメント・テストが使用されている。

ELPAの英語プレイスメント・テストは、以下の表に示されている通り、リスニング100点、語彙50点、文法50点、リーディング100点の300点満点(試験時間60分)である。総合スコア及び各分野のスコアは5～1のレベルで表示される。

表1: ELPA の評価基準

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	255～300	43以上	43以上	85以上	85以上
4	225～254	38～42	38～42	75～84	75～84
3	165～224	28～37	28～37	55～74	55～74
2	120～164	20～27	20～27	40～54	40～54
1	0～119	20未満	20未満	40未満	40未満

本学英語文化コミュニケーション学科 2019 年度入学生の英語プレイスメントテストの成績分布は以下のとおりである。(2019 年 4 月実施。73 名が受験。)

表 2：2019 年度入学生の結果

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	5	10	8	9	10
4	10	6	5	7	6
3	35	36	31	35	35
2	19	14	19	19	19
1	4	7	10	3	3

「一定のレベル以上である」とみなせる「レベル 3 以上」の学生数と、「以下である」と考えられる「レベル 2 と 1」の学生数でくくってみると以下のようなになる。

表 3：レベル別表示 (2019 年度入学生)

レベル	語彙		文法		リーディング		リスニング	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
5+4+3	52	71.2	44	60.3	51	70.0	51	70.0
2+1	21	28.8	29	39.7	22	30.0	22	30.0

2019 年度入学生は、2018 年度および 2017 年度入学生とは異なる成績分布が見られる。比較参考のため、以下に 2018 年度と 2017 年度入学生の結果およびレベル別表示を示す。(2018 年度 50 名受験、2017 年度 58 名受験。)

表 4：2018 年度入学生の結果

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	1	5	3	1	5
4	2	6	1	4	4
3	22	17	18	18	28
2	21	19	17	24	12
1	4	3	11	13	1

表5：レベル別表示（2018年度入学生）

レベル	語彙		文法		リーディング		リスニング	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
5+4+3	28	56.0	22	44.0	23	46.0	37	74.0
2+1	22	44.0	28	56.0	27	54.0	13	26.0

表6：2017年度入学生の結果

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	2	6	6	5	3
4	5	2	3	5	3
3	19	23	13	15	27
2	23	18	26	22	20
1	9	9	10	11	5

表7：レベル別表示（2017年度入学生）

レベル	語彙		文法		リーディング		リスニング	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
5+4+3	31	53.4	22	37.9	25	43.1	33	56.9
2+1	27	46.6	36	62.1	33	56.9	25	43.1

本学の学生の場合、レベル5及び4の学生の割合はさほど高くなく、レベル3の学生が相当数いることがわかる。

2018年度および2017年度入学生については、語彙とリスニングではレベル5～3の学生が半数を超えるが、文法とリーディングでは逆にレベル2～1の学生が半数以上となっていた。文法とリーディングが「弱い」傾向が見られ、特に強化が必要な領域であると思われた。しかし2019年度入学生については、全ての領域において、レベル5～3の学生が半数を超え、「語彙」、「リーディング」、「リスニング」では7割を占めた。「文法」も6割だった。例年よりも英検2級取得者が多く、英語基礎力のある学生が多数入学した結果と考えられる。

一方で、レベル1の学生も一定数おり、とりわけ「文法」がレベル1の学生が10名い

る。「英文法」は2018年度より3クラス開講し、文法基礎力のない学生への対応を行っているが、今後もこの体制は必要であろう。

2. 英語学習に関する実態調査－アンケート

①調査の概要

(1) 調査の対象と方法

2019年度敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科入学生全員に対して、2018年度および2017年度と同じアンケート調査を実施した。調査には、入学者82名中74名が参加した。調査は2019年10月23日の「コミュニケーション入門」の時間を使い、その日の担当者である川又が説明、実施、回収を行った。そのため回収率は100%である。回答は、該当する記号に○をつけてもらう選択式で行い、最後の2つの設問で記述式を併用した。

(2) 調査項目・内容

アンケートの設問は全部で31問。英語文化コミュニケーション学科1年生の「英語学習経歴」と「英語学習に対する意識」の2点を明らかにすることを目的として作成された。個々の設問については、川又・上野(2019)の末尾に資料として掲載されているので、そちらを参照されたい。なお、本アンケートの作成にあたっては、川又(1996)、小田他(1997)を参考にした。

②アンケートの結果と分析

以下、アンケートの設問の順番に沿って、結果の報告および分析を行うことにする。なお、2018年度および2017年度の英語文化コミュニケーション学科入学生(現2、3年生)に対しても同様の調査を行っており、その結果についても必要に応じて言及する。

問1から問5にかけては、海外渡航経験について聞いている。

問1：海外へ行ったことがありますか。※留学生(りゅうがくせい)の人は、日本以外の国や地域に行ったことがあれば、「ある」に○をつけて下さい。
ある：36名(49%)　　ない：38名(51%)

ほぼ半数の学生が「経験あり」と答えている。これは2018年度および2017年度の調査結果と同様である。

問2：海外へ行った目的は何ですか。

観光：15名 勉強（国際交流の派遣プログラムや高校の海外研修も含む）：25名
その他：5名

「勉強（高校の海外研修も含む）」と「観光」が多くなっている。6名は「観光」と「勉強」の重複である。「観光」「その他」の重複が1名、「観光」「勉強」「その他」の重複が1名いる。「その他」の5名は「家族の仕事」や「生まれたところ」などと答えている。

問3：海外で生活した通算（つうさん）の期間はどのくらいですか。

1か月以内：27名 3か月以内：1名 6か月以内：0名 1年以内：1名
2年以内：0名 2年以上：7名

多くは「1か月以内」だが、「家族の仕事」等と答えた学生を中心に、「2年以上」が7名いるのは今年度の特徴である。両親のどちらかが、日本以外の出身で、幼少期にそこで過ごした可能性があると思われる。

問4：海外で一番長く生活していた地域は次のうちどれですか。

英語圏：28名 ドイツ語圏：0名 フランス語圏：0名 中国語圏：5名
朝鮮語圏：0名 イタリア語圏：0名 ロシア語圏：0名 その他：5名

圧倒的多数は「英語圏」であり、これも2018年度および2017年度の調査結果と同様である。「その他」については、問3と同様であると考えられる。

問5：海外へ行った時の年齢（ねんれい）は、次のどれにあたりますか。（2つ以上選んでもよい）

6歳未満 (under 6 years old)：3名 6歳～12歳 (6 to 12 years old)：8名
13歳～15歳 (13 to 15 years old)：6名 16歳～18歳 (16 to 18 years old)：25名
19歳以上 (19 years old and over)：4名

最も多いのが「16歳～18歳 (16 to 18 years old)」の25名であるが、その内「勉強（高校の海外研修も含む）」が23名、「観光」が10名である（7名は重複）。それ以外についても、すべての年齢区分にわたって経験者がいることがわかる。

問1から問5については、2019年度は滞在期間の長い学生がみられたが、それ以外は、おおむね2017年度および2018年度の調査結果と同様であった。

問6から問8では、外国人との接触や本学での外国人教員の授業について尋ねている。

問6：今まで学校以外で英語を使って外国人（がいこくじん）と話をしたりメールやラインをしたりする機会がありましたか。

しばしばあった：16名（22%） たまにあった：31名（42%）
全くなかった：26名（35%） 無回答：1名

64%の学生は何らかの形で接触を持った経験があり、「全くなかった」と回答した学生は35%である。2018年度に「全くなかった」と回答した学生は29%、2017年度は36%であったので、今回はまた2017年度並みに戻っていることになる。

問7：本学では、外国人の先生の英語の授業時間数は

多すぎる：2名（3%） 適切：54名（73%） 少なすぎる：11名（15%）
わからない：5名（7%） 無回答：2名

「適切」が73%となった。2018年度は60%、2017年度もほぼ同じの61%であったことを考えると、割合が10%以上、上昇したことになる。なお、「少なすぎる」と回答した画学生の、後述する「問10（英語の勉強時間）」や「問11（英語の読書量）」の回答との相関を見て見ると、必ずしも関係しているわけではないことがわかった。つまり、少なすぎる、と回答しても、その学生が、それに見合う学習をしているわけではない、ということである。このあたりは意識のさらなる喚起が必要であろう。

問8：外国人の先生の英語の授業に

十分ついていける：28名（38%） 何とかついていける：42名（57%）
ほとんどついていけない：3名（4%） 無回答：1名

2019年度入学者は、「十分ついていける」と「何とかついていける」を合わせると96%となり、「ほとんどついていけない」と回答した学生は4%であった。「ほとんどついていけない」は、2018年度と同率である。2017年度は9%であったので、2年続けてその時よりは、ほぼ半減したことになる。共通教育の英語のクラス（KEEP²⁾については、本稿「1」でも述べた通り、プレイスメントテストの結果に基づいた習熟度別クラス分けがなされている。割合は減少したとはいえ、これらの学生たちについては、通常の授業とは別の何らかの支援体制が必要であろう。

問9から問12では、英語の勉強方法や勉強時間等について尋ねている。

問9：英語を今、どのように勉強していますか。その勉強方法として、該当（がいとう）するものを選んで下さい。（いくつ選んでもよい。）

大学の授業の予習・復習：68名 英会話学校：2名 個人教授：1名
ラジオ・テレビ講座：6名 通信教育：0名 CD・DVD等の使用：9名
新聞・雑誌をよく読む：3名 原書（もともと英語で書かれたもの）を読む：7名
パソコン通信やインターネットなど：27名 外国人が身近にいてよく使う：1名
全く勉強していない：4名
その他：2名（音楽、英検対策、TOEIC対策等）

「大学の授業の予習・復習」が68名（92%）と最も多く、これは2018年度および2017年度と同様の結果であった。「パソコン通信やインターネットなど」が27名（36%）で、2018年度の15名（29%）、2017年度の16名（30%）よりもやや多くなっている。スマートフォン等の電子機器類の発達、普及が関係していると考えられる。「ラジオ・テレビ講座」は6名（8%）と例年通り少なく、より積極的な活用が望まれるところである。「全く勉強していない」は、4名（5%）で、2018年度の3名（6%）、2017年度の5名（9%）よりは微減といった状況ではあるが、何らかの対策が必要であろう。

問10：大学の授業を大学に来て受けること以外で、一日に勉強している時間を選んで下さい。（授業の予習・復習のための時間を含んでもかまいません。）

30分程度：26名（35%） 1時間程度：29名（39%） 2時間程度：14名（19%）
3時間以上：4名（5%） 無回答：1名

「30分程度」と「1時間程度」を合わせると7割強である。比較参考のため、2018年度および2017年度の結果もあわせて示す。

2018年度

問10：（設問省略）

30分程度：18名（35%） 1時間程度：16名（31%） 2時間程度：9名（17%）
3時間以上：8名（15%）

2017 年度

問 10：(設問省略)

30分程度：26名(49%) 1時間程度：21名(39%) 2時間程度：3名(6%)
3時間以上：1名(2%)

ここでは時系列的に比較すると、「30分程度」が49%→35%→35%(2017年度→2018年度→2019年度、以下同じ。),「1時間程度」が39%→31%→39%、「2時間程度」が6%→17%→19%、「3時間以上」が2%→15%→5%と推移している。より多くの時間勉強する学生はある程度いるが、それでも7割前後の学生の勉強時間は1時間程度以下である。これは大学生としてかなり少ないと指摘せざるを得ず、本学学生の学習習慣が十分には確立されていないことがわかる。

問 11：大学の授業以外で、英字新聞や英文雑誌をどのくらい読みますか。(インターネット利用を含む)

毎日読む：4名(5%) 週に1回は読む：4名(5%) 月に1回は読む：7名(9%)
年に数回読む：10名(14%) 全く読まない：49名(66%)

「全く読まない」が約6割強、「年に数回読む」が約1割で、あわせて8割という結果になった。「毎日読む」、「週に1回は読む」という意欲のある学生は1割にとどまった。全体的に自主的な学習に取り組んでいる学生の割合は低いと言わざるを得ないだろう。2018年度および2017年度の結果は以下の通りである。

2018 年度

問 11：(設問省略)

毎日読む：1名(2%) 週に1回は読む：8名(15%) 月に1回は読む：1名(2%)
年に数回読む：12名(23%) 全く読まない：31名(58%)

2017 年度

問 11：(設問省略)

毎日読む：2名(4%) 週に1回は読む：9名(17%) 月に1回は読む：1名(2%)
年に数回読む：6名(12%) 全く読まない：34名(65%)

「毎日読む」と「週に1回は読む」の割合は、2018年度および2017年度では2割前後だったが、2019年度は1割に減少している。「年に数回読む」と「全く読まない」を合わせると、おおむね8割になるのは変わらない傾向である。問10の英語の学習時間と合わせて、本学科学生のより積極的な取り組みが求められるところである。

問12：授業で使用する教科書以外に、英語で書かれた本を一年に何冊くらい読みますか。

10冊以上：14名(19%) 9～6冊：3名(4%) 5～3冊：7名(9%)
2冊以下：49名(66%) 無回答：1名

「10冊以上」という学生が2割近くいるが、「2冊以下」が7割弱と圧倒的に多い。2018年度および2017年度の結果も示す。

2018年度

問12：(設問省略)

10冊以上：5名(9%) 9～6冊：3名(6%) 5～3冊：7名(13%)
2冊以下：38名(72%)

2017年度

問12：(設問省略)

10冊以上：2名(4%) 9～6冊：2名(4%) 5～3冊：13名(25%)
2冊以下：35名(67%)

両年度とも「2冊以下」の割合が高く、おおむね同様の傾向であったことがわかる。

この3年間の問10～問12の結果を見ると、本学科学生の学習習慣の確立と、より積極的で自主的な英語学習への意識をどのように喚起するかが、やはり大きな課題であると考えられる。

問 13 では、海外留学について尋ねている。

問 13：大学在学中に、勉強のために海外へ行きたいと思いますか。(大学の海外研修や個人の短期・長期留学を含む)

はい：56 名 (76%) いいえ：18 (24%)

76%の学生が「はい」と答えており、留学への志向が強くあることがわかるが、2018年度の87%、2017年度の85%よりはやや少なくなっている。いわゆる「内向き志向」の表れなのか、単なる年度間毎の偏差であるのかは、今後の調査が必要であろう。

問 14 と問 15 では資格試験について尋ねている。

問 14：英語に関する資格試験（しかくしけん）を受けたことがありますか。

ある：58 名 (78%) ない 16 名 (22%)

※「ある」の人は、その資格試験を書いて下さい。(いくつ選んでもよい)

実用英語技能検定（英検）：57 名 TOEIC：11 名 TOEFL：0 名

国連英検：0 名 商業英語検定：1 名 その他：3 名（資格試験名：GTEC）

8割の学生が資格試験を受けたことがあると答えており、この内日本国内の高校出身の57名は、全員、実用英語技能検定（英検）を受けている。高校では英検を学校単位で受験させるところがあることと、本学では資格特待生³⁾の要件として英検2級（以上）の取得を求めていること、等が関係していると考えられる。TOEIC を受けたと回答した学生も11名いた。

問 15：もし差し支えなければ、その資格試験の結果を教えてください。

(英検2級、TOEIC 580点など)

回答は任意なので全員ではないが、記入をしてくれた学生たちの結果は以下の通りである。

<実用英語技能検定（英検）>

1級：1名 準1級：2名 2級：27名 準2級：5名 3級：4名 4級：1名

<TOEIC>

800点台：1名 700点台：1名 400点台：1名 300点台：1名

英検 1 級や準 1 級、TOEIC 800 点台など、高い英語力を持って入学してくる学生がいることがわかる。2 級保持者の多くは、資格特待生の学生であろう。

問 16 から問 20 では、自身の英語力に対する自己評価をしてもらった。以下、まとめて結果を示す。それぞれの項目で最も多かった回答には下線を引いてある。

以下の問 16～問 20 では、現在の自分の英語力に対するあなた自身の自己診断（じこしんだん）をして下さい。

問 16：聞く力

十分ある：11 名 (15%) まあまあある：43 名 (58%) あまりない：20 名 (27%)

問 17：話す力

十分ある：5 名 (7%) まあまあある：32 名 (43%) あまりない：37 名 (50%)

問 18：読む力

十分ある：16 名 (22%) まあまあある：44 名 (59%) あまりない：14 名 (19%)

問 19：書く力

十分ある：10 名 (14%) まあまあある：43 名 (58%) あまりない：21 名 (28%)

問 20：文法知識

十分ある：7 名 (9%) まあまあある：42 名 (57%) あまりない：25 名 (34%)

「聞く力」、「読む力」、「書く力」、「文法知識」については「まあまあある」という回答が多かった。「話す力」については、「あまりない」が上回った。プレイメントテストの結果では、語彙とリスニングではレベル 5～3 の学生が半数を超えるが、文法とリーディングでは逆にレベル 2～1 の学生が半数以上となっており、必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い面もあるようだ。

比較参考のため、2018 年度および 2017 年度の結果もあわせて示す。

2018 年度

(設問省略)		
問 16：聞く力		
十分ある：9名 (17%)	<u>まあまあある：25名 (48%)</u>	あまりない：18名 (35%)
問 17：話す力		
十分ある：3名 (6%)	<u>まあまあある：29名 (56%)</u>	あまりない：20名 (38%)
問 18：読む力		
十分ある：9名 (17%)	<u>まあまあある：33名 (63%)</u>	あまりない：10名 (19%)
問 19：書く力		
十分ある：5名 (4%)	まあまあある：23名 (44%)	<u>あまりない：24名 (46%)</u>
問 20：文法知識		
十分ある：5名 (10%)	<u>まあまあある：28名 (54%)</u>	あまりない：19名 (37%)

2017 年度

(設問省略)		
問 16：聞く力		
十分ある：6名 (11%)	<u>まあまあある：26名 (49%)</u>	あまりない：21名 (40%)
問 17：話す力		
十分ある：4名 (8%)	まあまあある：16名 (30%)	<u>あまりない：33名 (62%)</u>
問 18：読む力		
十分ある：2名 (4%)	<u>まあまあある：32名 (60%)</u>	あまりない：19名 (36%)
問 19：書く力		
十分ある：2名 (4%)	まあまあある：20名 (38%)	<u>あまりない：31名 (58%)</u>
問 20：文法知識		
十分ある：3名 (6%)	まあまあある：18名 (34%)	<u>あまりない：32名 (60%)</u>

2019 年度入学者では、「話す力」のみが、「あまりない」の回答が多数であったのに対し、2018 年度では「書く力」、2017 年度入学者では「話す力」「書く力」「文法知識」の 3 項目で「あまりない」の回答が最多であった。

入学時のプレイスメントテストの結果を踏まえると、(先にも指摘したように) 必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い。このギャップをどのように埋

めていくかが、両者に共通して考えなければならない課題の一つであろう。

問 21 では、英語学習の熱意・度合いを 5 段階で自己評価してもらった。

問 21：あなたの現在の英語学習の熱意・度合いを数字で表すとどのくらいになりますか。数字に○をつけて下さい。

高い		ふつう		低い
5	4	3	2	1
9名 (12%)	17名 (23%)	37名 (50%)	9名 (12%)	1名 (1%)

(※無回答 1名)

「4」と「5」で4割弱、「3」が半数、「2」と「1」で1割強という結果になった。比較参考のため、2018年度および2017年度入学生の結果もあわせて示す。

2018年度

問 21：(設問省略)

高い		ふつう		低い
5	4	3	2	1
8名 (15%)	18名 (35%)	17名 (33%)	6名 (12%)	2名 (4%)

2017年度

問 21：(設問省略)

高い		ふつう		低い
5	4	3	2	1
4名 (8%)	17名 (32%)	22名 (41%)	6名 (11%)	4名 (8%)

「4」と「5」を合わせた学生は、2018年度は5割、2017年度は4割であったのが、2019年度では4割弱となっている。2019年度はその分「3」が増加している。3年度とも「2」や「1」と答えている学生も1～2割おり、学習意欲の衰退や欠如が心配される。退学者防止の観点からも、こういった学生たちへの適切な支援が重要であろう。

問 22 から問 25 では、大学卒業までに身に着けたいと考えている英語力を選んでもらった。

問 22：聞く力	十分聞き取れる：55 名 (74%) おおむね聞き取れる：15 名 (20%) 最低限必要な情報を聞き取れる：4 名 (5%)
問 23：話す力	自分の考えを十分話すことができる：50 名 (68%) 自分の考えをおおむね話すことができる：19 名 (26%) 自分の考えを最低限話すことができる：5 名 (7%)
問 24：読む力	辞書を引かずに、原書・新聞などが読めて理解できる：55 名 (74%) 辞書を引きながら、原書・新聞などが読めて理解できる：16 名 (22%) 辞書を引きながら、最低限必要な情報を得ることができる：3 名 (4%)
問 25：書く力	自分の考えを十分書くことができる：55 名 (74%) 自分の考えをおおむね書くことができる：15 名 (20%) 自分の考えを最低限書くことができる：3 名 (4%)

どの項目においても、最も高いレベルの英語力を身に着けたいと考えていることがわかるが、「話す力」の理想は（現実を考えて）やや低いということだろうか。2018 年度および 2017 年度入学生についてもほぼ同様の結果ではあるが、2018 年度入学生は「読む力」と「書く力」の理想が、「聞く力」と「話す力」の理想に比べてやや低い傾向が見られた。

問 26 では大学卒業後の英語とのかかわりについて尋ねている。

問 26：大学卒業後も英語を役立てたいと思っていますか。
はい：59 名 (80%) いいえ：1 名 (1%) まだわからない：14 名 (19%)

問 26 で「はい」と答えた人は、次の問 27 にも答えて下さい。

問 27：具体的にどのように役立てたいと考えていますか。
仕事（外資系会社や英語教師など）：49 名
語学ボランティアや外国人との交流などのため：19 名
その他：3 名

卒業後も英語を役立てたいと回答した学生が8割と多く、やはり将来の職業と結びつけて考えていることがわかる。実際には卒業後の就職先は様々であるが、「語学ボランティアや外国人との交流などのため」と答えた学生もかなりおり、英語の学びがその後の人生にもつながっていくことを示唆している。

2018年度入学生では、「はい」が45名(87%)、「いいえ」が0名、「まだわからない」が7名(13%)。2017年度入学生では、「はい」が47名(89%)、「いいえ」が0名、「まだわからない」が6名(11%)であったので、2019年度入学生はやや低いほうに移っているといえるかもしれない。

問28と問29では、中学校・高校時代の英語学習について尋ねている。

問28：中学校・高校時代(junior or senior high school days)は英語は好きでしたか。

好き：39名(53%) 嫌い：8名(11%) 好きでも嫌いでもなかった：27名(36%)

「好き」と回答した割合が5割強であるのに対し、「好きでも嫌いでもなかった」も3割強いる。2018年度入学生は、「好き」が35名(67%)、「嫌い」が7名(13%)、「好きでも嫌いでもなかった」が11名(21%)であった。同様に2017年度入学生は、「好き」が31名(59%)、「嫌い」が5名(9%)、「好きでも嫌いでもなかった」が17名(32%)であったので、2019年度生は、「好きでも嫌いでもなかった」の比率が2017年度生と似通っていることになる。このような学生たちが、どうして英語が好きになって本学科に入学したのか知りたいところである。

問29：中学校・高校時代に英語をどのように勉強していましたか。その勉強方法として、該当(がいとう)するものを選んで下さい。(いくつ選んでもよい。)

学校の授業の予習・復習：64名 塾・予備校(private cram school)：29名

家庭教師(private tutor)：5名 ラジオ・テレビ講座：4名 通信教育：3名

CD・DVD等の使用：19名 新聞・雑誌をよく読む：1名

原書(もともと英語で書かれたもの)を読む：6名

パソコン通信やインターネットなど：16名 外国人が身近にいてよく使う：1名

全く勉強していない：6名 その他(参考書を使って自分で勉強、英検対策)：6名

「学校の授業の予習・復習」が64名と最も多くなっている。「塾・予備校」や「家庭教師」の回答が一定数あるのは、大学受験対策といった意味合いが強いだろう。「原書(もともと

と英語で書かれたもの)を読む」と回答した学生が6名おり、中学校・高校時代から熱心に英語学習に取り組んだ学生がいることがわかる。一方で、「全く勉強していない」と回答した学生も6名いる。

なお、2018年度および2017年度入学生についても、ほぼ同様の結果となっている。

問30と問31は記述式の設問となっている。

問30：これまで大学入学後に受講した中で、あなたが知的刺激を受けた授業と、なぜそのように感じたのかを書いて下さい。

以下、学生の回答を簡潔にまとめる。

<KEEP B について>

- ・すべて英語で行われる授業で、英語を話す機会が多い
- ・ネイティブの先生の授業が刺激的。

<KEEP A・KEEP B 共通>

- ・少人数クラスで質問しやすい。

高校までの授業とは違った新鮮な喜びを覚えるようである。今回はKEEP Bをあげた学生が圧倒的に多かった。

問31：あなたが大学の学びの中で興味・関心を持っているのはどのようなことですか。また今後、英語文化コミュニケーション学科（もしくは自分の学科）でどのようなことを中心に学びを深めていきたいと考えていますか。自由に書いて下さい。

「英語力をつけたい／話せるようになりたい」との記載は多かった。やはり実用英語志向は強いことがわかる。教職科目をあげた学生が数名いたが、全体的に記述そのものをしてくれた学生の数が少なく、内容も2018年度と比べてあまり多様でなかった。

③アンケートを終えて

今回のアンケートの注目すべき点を、2018年度および2017年度の結果とあわせてまとめると、以下のようなになるだろう。

- (1) 本学入学時までに海外渡航経験のある学生の割合が約5割あり、これは2018年度および2017年度とほぼ同じであった。高校での海外研修等が一般化してきていることがわかる。
- (2) 外国人との接触については、64%の学生は何らかの形で接触を持った経験があり、「全くなかった」と回答した学生は35%である。2018年度に「全くなかった」と回答した学生は29%、2017年度は36%であったので、今回はまた2017年度並みに戻っていることになる。いわゆる「二極化」の状況がややぶり返した感があるが、これが一般的な傾向であるのか、それとも2019年度の入学生に限ったことであるのかは、今後の継続的な調査が必要であろう。
- (3) 高いレベルの英語力を大学在学中に身に着けたいとかなり多くの学生が考えているが、大学の授業の予習、復習を含む実際の勉強時間は、毎日1時間程度以下が74%であった。2018年度は66%、2017年度は88%で、多少のばらつきはあるものの、依然としてかなり少ない状況が続いている。
- (4) 2019年度入学者では、「話す力」のみが、「あまりない」の回答が多数であった。それに対し、2018年度入学者では「書く力」、2017年度入学者では「話す力」、「書く力」、「文法知識」の3項目で、「あまりない」の回答が最多であった。しかしながらプレースメントテストの結果を見ると、必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い面もあり（これは毎年度にあてはまる）、何らかの意識喚起が必要であろう。話す力については、大学在学中に身に着けたい、伸ばしたい、と考えている学生の割合が高いのは、3年間の調査に共通して言えることである。

アンケートの全体的な結果を踏まえると、2019年度生の場合、英語が得意で毎日の勉強も怠らない学生の割合が約20%、大学での勉強や生活に何らかの手を差し伸べる必要がある学生が約5%、その両者の間に平均的な学生が存在している、というのが実態であろうか。特に、身に着けたいと考えている（高いレベルの）英語力と、実際の勉強時間の差（ギャップ）は2018年度生、2017年度生と同様に大きく、学習習慣の確立を促す何らかの方策と学生自身の意識の改革が求められよう。

ここ3年間のプレースメントテストの結果を見ても、本学科の学生達については、文法が「弱い」傾向が見られる。こういった点を踏まえ、2018年度の「英文法」（英語文化コミュニケーション学科1年生必修科目）の授業については、従来2クラス編成であったものを3クラス編成とし、より少人数できめ細やかな教育ができるように改善を行った。

これは今後も継続していく必要があろう。

また、「1」でも触れた通り、本学科の場合、プレイスメントテストのレベル5及び4に相当する比較的高いレベルの学生はいるのであるが、その割合はさほど高くなく、実際にはレベル3の学生が相当数いることがわかる。レベル1の学生についても英語文化コミュニケーション学科内にも一定数はおり、この学生たちには、学科の学びのための支援体制の拡充は必要であると考えられる。これについては、2018年度後期より、資格特待生の学生が履修や英語の勉強法について他の学生からの相談を受ける、という取り組みも始まっている。全般的な学習意欲の喚起、および配慮が必要な学生への積極的な支援は、必須の課題である。

おわりに

本稿では、2019年度入学の敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生について、プレイスメントテストやアンケートの結果をもとに、英語能力の実態や英語学習への意識等を明らかにすることを試みた。今年度は英検2級（相当以上）を取得した学生たちが例年よりも多く入学したが、英語能力や学習意欲等において「多様な」学生を受け入れている状況に変わりはなく、そのような実態を踏まえたカリキュラム編成や授業方法の改善、学習支援体制の構築、さらには学生の学習習慣の確立が大きな課題であると考ええる。

今後は、各年度の入学者の英語力の伸長度や英語学習に対する意識の変化等についても継続的に調査していきたい。

本稿は、「はじめに」、「おわりに」を川又が、「1. 英語能力に関する実態調査－プレイスメントテストの結果について」を上野が執筆。一部、2018年度および2017年度入学生の結果を踏まえた加筆を川又が行っている。「2. 英語学習に関する実態調査－アンケート」については、2019年度入学生の結果の集計と分析、および執筆を上野が行い、川又が2018年度および2017年度入学生の結果を踏まえた加筆を行った。それぞれの担当箇所については相互に確認、検討し、必要な修正を行っている。

なお、本研究は、2017－18年度敬和学園大学人文社会科学研究所研究補助を受けた研究（題目：「高大7年制教育に向けてのパイロットスタディ（試験的研究）－敬和学園高校出身者の英語力の伸長度調査」 研究代表者：川又正之、研究分担者：上野恵美子）を踏まえての継続研究である。

註

- 1) 本学の共通教育における英語プログラムのカリキュラム変遷については、川又、上野（2018, pp. 25-27）を参照されたい。
- 2) 「KEEP」は Keiwa Extensive English Program の略で、「KEEP A」が「読む・書く」、「KEEP B」が「聴く・話す」を中心とした授業である。いずれも週 90 分授業×2 コマで（各 4 単位）、英語文化コミュニケーション学科の学生の必修である。
- 3) 実用英語技能検定 2 級（以上）の合格者または TOEIC 550 点（以上）達成者は授業料（69 万円）を免除するという制度が適用された学生。

参考文献

- 川又正之、上野恵美子 2019.「敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生の英語能力・英語学習に関する実態調査(2)」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』No. 17、pp. 1-18. 敬和学園大学
- 川又正之、上野恵美子 2018.「敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生の英語能力・英語学習に関する実態調査(1)」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』No. 16、pp. 25-46. 敬和学園大学
- 川又正之、市川真矢、小田寛人 1996.「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(1)」『常葉学園短期大学紀要』第27号、pp. 101-119. 常葉学園短期大学
- 小田寛人、川又正之、市川真矢 1997.「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(2)」『常葉学園短期大学紀要』第28号、pp. 135-148 常葉学園短期大学